

アイゲン・バラエフ。
博士（歴史学）

1990年1月20日の 原因と結果

1990年1月20日の事件はアゼルバイジャンの現代史上最大の転機の一つであった。



この事件はソ連の領土で発生した様々な地政学的な変化の結果として生じた。20世紀の終わりにソ連の崩壊プロセスはピークに達した。その理由の一つは、加盟共和国に起きていた民族解放運動であった。特に巨大なのはバルト三国やコーカサス、モルドバの民族運動であった。この共和国に（アゼルバイジャンを含めて）発生した民族運動の主要な目的は主権を求めて戦うことだった。1989年9月23日、アゼルバイジャ

ンはソ連の加盟共和国の中で初めて「アゼルバイジャンSRの主権について」という憲を採択した。アゼルバイジャン議会のこのような決定は完全な主権を得るまでの道程において最も重要な行為になった。

ソ連中央では、アゼルバイジャンで起きている傾向を止めるのは無理だということが日ごとに明確になっていた。その結果、アゼルバイジャンの離脱傾向や避け難いソ連の崩壊を阻止するため、ソ



ビエト政権は武力を利用することにした。軍事作戦は、独立を求めてソ連から離脱しようとする全ての加盟共和国を脅かすための政策であった。アゼルバイジャンが足場として選ばれたのは偶然ではない。なぜなら、アゼルバイジャンは加盟共和国の中で最も「弱い国」の一つとされていたからである。要するに、バルトや南コーカサスの隣国に比べると、アゼルバイジャンは西の方に権力のある庇護者を持っていなかった。しかも、それらの国の中でアゼルバイジャンは人口の大半がムスリムという唯一な共和国だ

った。そのことはソビエト指導部に、国際社会の監視下にある一般への武力利用を正当化するために、悪名高き「イスラム原理主義」の脅威というものをその根拠として利用する機会を与えることとなった。実際に、ゴルバチョフ氏はイスラム原理主義者が政権を握らないよう、アゼルバイジャンに軍隊を送ったと断言した。

また、ソビエト政権はアゼルバイジャンに発生した民族運動がカラバフ紛争の背景に起きていたということを考慮した。カラバフ紛争とは、アルメニアはアゼルバイジャ

ンのナゴルノ・カラバフという領土権を主張することに基づく領土問題である。従って、武力の行使を是認するために挑発を行うことは容易であった。1989年12月の終わり頃、カラバフ紛争の不安定がピークに達した。1989年12月1日、アルメニアSSRの最高会議に定められた判決は紛争の原因になった。この判決によって、アルメニアSSRとナゴルノ・カラバフは合併した。その後のアルメニア武装隊員の活動化は、アゼルバイジャンとの戦争をもたらした。カラバフ紛争が始まって以来初めて、ア



ルメニア分離主義者の攻撃の目的がナゴルノ・カラバフの行政の境を越えるアゼルバイジャンの領域となった。

実際に、ソビエト政権の観察的なポジションやアルメニア側の違憲行為を防止するための適切な措置を講じないことは、アゼルバイジャンの政治情勢の激化につながっている。以前、自主的な行為

を取れないアゼルバイジャンの共産党は、こんな危急な状況でもソビエト政権の命令に従うだけであった。1990年の始めに、アゼルバイジャンの管理부가最終的に信用を失墜して共和国の情勢上のコントロールを完全に失った。このような状況下では、1990年4月に行われる予定だった議会議員選挙では、アゼ

ルバイジャンの人民戦線を首領とする反対党が選ばれることは、少しも疑う余地がなかった。この反対党はソ連共産党からの分離を執拗に訴え、戦闘した。こうした状況が全て、バクーで実施された軍事作戦の原因と理由になった。

おかしなことに、このドラマチックな状況で何の行動もしなかった共和管理부가、突如勇敢になって武装民兵を作り、積極的に戦闘しはじめた。1990年1月の始めに、共和国の当時のヴェジロフというリーダーが、武器の供給を約束して若者に民兵として登録せよと呼びかけた。

ソビエト政権に対する巨大な挑発が準備されていたことは明らかであった。実際に、1990年1月13日にバクーのいたるところでソ連の諜報に挑発されたポグロムが始まった。このポグロムはアルメニア人によって起こされた。1989年12月30日に「アザドリグ」という新聞はバクーに住んでいるアルメニア人によって、こういう不法な行為が起こされる可能性に関して政府に忠告した。にもかかわらず、政府はこのポグロムを防ぐために何の手段もとらなかった。既にポグロムが始まった後、法執行当局や町にある12千人のソ連内務軍は無反応であった。軍



隊が介入しないように命令されていたことを証明する何らかの反論し難い事実がある。このような事の成行きはソビエト政権にとっては好都合であった。ただアゼルバイジャン人民戦線の活動分子の努力のおかげで、1月16日に首都に起こっていたポグロムを止めることができた。

しかし、アゼルバイジャンの既に緊迫した状況をそれ以上に緊張させたのは、1990年1月15日にソ連最高会議が出した「ナゴルノ・カラバフおよびその他の地域における緊急事態」という法令であった。特に、バクーとギャンジャ市に夜間外出禁止令を課すことを提案する第7条は状況をかなり刺激した。この法令はアゼルバイジャンにおいては、ソビエト政権がアルメニアよりびいきのポジションを取るためのもう一つの証拠として評価されていた。おまけに書類には、アルメニアの不安定な情勢の原因である緊急事態の宣告に関して何の情報もなかったからである。

1990年1月16-19日に、バクーで5万人以上の兵士を数える巨大な部隊が作られていた。兵士となった人は、特にザカフカージェ、コーカサス、モスクワ、レニングラード、および他の軍管区のエリアから来た人で



あった。また、その中に予備兵も多く、バクーに兵隊が入ったとき特に目立ったアルメニア人もいた。犠牲者が多く出たのは、予備兵の方であった。作戦の前に、アゼルバイジャン人を憎むよう、予備兵は心理的な反感を抱いていた。しかも、予備兵の中には刑事犯罪者さえもいた。

ポグロムの後のバクーの周辺への兵隊の集中は、ソビエト政権がアゼルバイジャンを例にして他の加盟共和国に脅威を与えようという意思の証明であった。1990年1月19-20日の夜に市





民が知らないうちにソ連軍戦車部隊は町に突入した。無差別の射撃が行われた結果、民間人の中に多くの犠牲者が出てしまいました。議会委員会のデータによると、1990年1月19-20日に子供も含む一般市民の集会で、131人が亡くなり、777人が負傷した。

確かに、この懲罰政策のおかげでソビエト政権はある戦略的な成功を収めた。要するに、緊急事態の宣告をしてか以来政府を作ったことで、アゼルバイジャンの状況を一時的に安定することができた。しかし、1990年1月20日の虐殺事件はアゼルバイジャンでのソ連の共産主義の終わりのきっかけとなったため、戦略の点でソビエト政権は完全な失敗をした。この事件は、ソビエトは文明の進んだ民主的な国家に改革で

きないということをはっきりと世界に知らせた。しかも、国家のアイデンティティや人の国民意識の感覚、主権のために戦う決意を刺激した。その証明は、1990年1月22日に虐殺事件の犠牲者の葬儀に表れた。たった1日後、死をとげた住民との最後のお別れをするため、全ての市民はまだ市内の中にいたソ連兵を恐れずに外へ出た。その日までバクーにはこのようなデモ行進は一度もなかった。しかも、人は痛みや哀悼のみならず、不敗をデモする、自由を得るための闘いを継続するという想いを持って動いていた。

従って、このデモ行進とその後40日間続く全国ストはアゼルバイジャンの独立を支持する全国民の一般投票につながった。その上、ソビエト帝国の破滅を証明す

る証拠であった。チホミロフという政治アナリストは、「ヴレミヤ」という日曜日の番組でバクーに起こった虐殺事件をコメントしながら、

「この帝国はもう脅迫や賄賂の政策で維持することができない」という真に予言のフレーズを言い出した。

結論として、1990年1月20日はアゼルバイジャンの現代史の名誉のある日ということを指摘すべきである。その忌しい夜こそ、丸腰のアゼルバイジャン人は世界の最も強力な軍隊の一つに直面して、独立を堅持することができた。その後、1991年10月18日にアゼルバイジャンの国会が独立の決議を採択したことは、1990年1月の事件の際に事実上到達したことの法的な証明になった。

ここでちょっとした歴史的な補説して20世紀の事件と比較すべきである。1918年5月28日にアゼルバイジャン民主共和国の成立宣告に先立って、3月の悲劇の事件があった。バクー、グバー、ランキャラン、ゴイチャイ、カラバフ、ザンゲズルという場所で、バクー・カウンスルに従った赤軍兵士やアルメニアの過激派で成立した民兵に大量のポグロムが発生した。そのとき、女性や子供、高齢者の数千人は残酷



に殺害された。見たとおり、歴史が繰り返していくのは、事件の一貫性に対してのみならず、参加者に対してでもある。独立はただで得られるものではない。血を流して得るものである。✦

参考文献

1. 「バキンスキ・ラボチー」、1989年9月26日
2. 「ビェストニック・ギャンジ」、1990年1月20日
3. 「バキンスキ・ラボチー」、1990年1月17日
4. 1990年1月の事件。「シット」という社会組織の軍事専門家に行われた調査の結果、「モスコブスキエ・ノボスチ」という新聞。1990年8月12日
5. 「バキンスキ・ラボチー」、1990年1月17日
6. アルメニアとアゼルバイジャンの紛争：軍事的次元。アラスリ。バクー、1990年、ページ10
7. 「モスコブスキエ・ノボスチ」という新聞。1990年8月12日
8. 「モスコブスキエ・ノボスチ」という新聞。1990年8月12日
9. 1990年1月19-20日にバクー市に発生した虐殺事件に関わるアゼルバイジャン共和国の最高会議の委員の意見、「ハルグ」という新聞。1992年1月18日